

感動と古代史 (二)

—— 福士幸次郎先生に ——

今 井 富 士 雄

三

弟子たる者は師匠の行きついた処から出発すべきものであるとは思ふもの、此れは理想であつて、果して先人の行きついた処まで行けるものかどうか分つたものではない。自分も同じ日本古代の研究にたづさわつていたとは云え、多少やつたのは考古学の方面であつて、言語伝承の領域には深くない、然し何時かは先生と同じ問題に就て別々な根拠から話合つたならば面白い結果になるのではないだろうかと期待をしていた。先生の行きついた所まででは行けないものとしてもせめて同じ問題に就て充分話合ふことはしたかつた、まだそこ迄も行かないうちに先生は亡くなられ、それに昨年唯一の学問の後継者であつた宍戸さんが突然亡くなり、にわかにあたりが淋しくなつた。のんきに構えていられないような気がしきりにすると共に、学問的責任の重さを自分としても感ぜ

ざるを得ない。

福士先生は詩人としてたぐい稀な素質をいだし、二十代にはもう一流の詩人として一家をなしていた。三十代には詩筆をとるのをやめて、伝統主義、地方主義の爲めと云うよりは祖国の爲めに身を挺して立上つていた。その言動は時流の顧みるところとはならなかつたものの先生を親しく知る者の間には特別な影響を与えている。行動の裏づけを得ようとしてくわだてた日本伝統の研究から姓氏の研究にたづさわり、地形、地名に由来するものと職業に由来するものが大部分であつて、製鉄関係の言葉が古代に於ては大きな役割を持つてゐることを発見した。製鉄技能者の生懸、信仰、殊に砂鉄からの製鉄は日本に限られた独特の方法であることに思い及んで俄かに先生の史眼は輝いたのであつた。日本伝統の根源を此処に見出し、広く山野を跋渉してその痕跡をたづね廻つたわけである。日本語のリズムの研究は既にある程度成し遂げら

れていて、私達が始めてお会いした頃は常にその話を聞かされたものであつたが、言語に対する愛情と鋭敏な感受性は鉄関係語彙の探求に發揮され、日本近隣諸国はもとより、古今東西広く世界的に拡大して行つた。先生にとつては単に言語上の問題ではなく、古代人の生活から精神内容に迄深く触れた問題として取上げられていた。その精しい内容に就ては昭和十七、八年に出た先生の「原日本考」正統二冊に譲るとして、尙実戸儀一氏の「民族形成と鉄の文明」及び「古代日韓鉄文化」を見て頂きたい。

考古学では日本の鉄器は青銅器よりも新しいと見る考えもあるけれども、鉄よりも青銅の方が古いと云う確かな証拠がないと云うのが本当だろうと思われる。鉄は青銅などに較べて腐朽し易いので遺物に頼る考古学にとつて苦手であるばかりでなく、始めの頃はどうしても多量に用いられたとも思われない。然し彌生式文化の初まつた頃は日本でも農業の初まつた頃であり、大陸の情勢などから推しても鉄は知られていたと思われる。それにしても鉄が本格的に使用せられ、農業の發展、大土木工事の開始と相俟つて、武力、権力の強大化をもたらししたのは古墳時代からであつて、膨大な古墳の築成の旺んに行われた頃は恰度日本では古代国家の成立と離すことが出来ない関係にあると思う。大体そんな見当は私にもついていた、此れを學問的に具体的に究明しようとするれば歴史地理的方法によつて、時間がかかるけれども個々の古墳の實

体を明らかにし、殊に古墳群の比較研究から立地條件、分布の狀態を或程度明らかにしなければならぬ、中途でやめてゐるが、自分が日本學術振興會から補助を受けて上代遺跡地名表の作製に取りかかつてみようとしたのもその為めであつた。副葬品から考へても問題が内包されているが、埋葬された人と階級、氏族制度、土地との結びつき、古墳と神社、国府との關係、發生から各地への伝播の速度、その時代等考へてみるべき問題は幾らでもある。

鉄の問題に就ては言語の方から先生は色々とうがつた考察をされたり、信仰から伝統の問題に迄切り込んで居られるが、考古学ではどちらかと云えば今の処消極的証明しか云えない状態であつて、朝鮮の鉄山やら出雲地方の砂鉄の問題なども段々とはつきりして来れば、言語、民族、文献の成果と相俟つて、考古学の平板さも救われ立体的な考察が可能になると思う。その時には古代国家の成立事情は勿論、古代国家のもつ性格内容も或程度は解明出来るように思われる。私が京大の考古学研究室に相当長らく御厄介になつていて、最後にやつてみようと思つたのは此の問題であつた。但し考古学が他の學問に伍して充分実力を發揮する為めには考古学プロパーの方法による研究が或る程度行われてからでないと、かえつて獨自性がそこなわれる心配があるばかりでなく、結局役に立たないものとなることは梅原教授にも常に注意された通りであると思う。綜合の為めにはかえつて或る期

間お互に学問的純潔を守る必要がある。自分は暫らく考古学的有形資料にたづさわつていればそのうちに言語・伝承の無形資料の側と手を握る時もあると思つていた。残された有形物ばかりが大切なものでその他のものは必要でないと思つたことはない、ただお互が共に語るには舞台がまだ出来ていない。銅剣銅鐸や銅鐸の問題にしても将来は必ず福士先生のサナギや鈴の祭祀の学説と無関係では居られなくなる時が来る。早く自分の学問も熟してそこ迄たどりつきたいものであるし、又そこ迄行かない限り此んな学問をしても何んにもならないものと思う。

何故先生に考古学の話を申上げなかつたかと今では自分乍ら不思議に思うけれども、学問は感動に土台を置かなければならないと常に云われたことに対しこたわつていたところも確かにある、その頃考古学は実証的、科学的な学問でなければならぬと考へ感動とは凡そ縁の遠いものだと信じ込んでいたらしい、従つて先生のおやりになつてゐる感動に根ざした学問は私の方から見れば学問よりは文学に近いあやふやなものであつて、少なくとも学問としては我々の近よるべからざるものだと思つていたらしい。又もう一つには自分自身の才能がそんなやり方に適していないのではなからうかという遠慮もあつた。此れは若い時の精神分裂を先生に訴へた事とも関連のある問題であるが、それだけに先生の所へ行つて自分がないものにひたつていたかつたのかも知れない。それ

に若しお話をしたところで「そんなことを幾らやつたつて君の探しているような我々祖先の内面生活は分りはしないよ」と云われそうな気もしていた。此れは先生にそう云われるのが恐ろしいと云うよりも実は自分自身で絶えず此の学問に秘かに抱いていた疑問でもあつた。然し先生は時々私の学問に就ても良く話を聞かれようとした態度に出られたのであるが、率直に自分の研究を申上げなかつたように思う、先生が鉄の話に夢中になつてゐる時にも「そんな鉄なんか、どうしてそんなに大切なのですか」とからかつてみたり、「どうして歴史のうちで古代史ばかり面白いと思うのでせう」とむしろ意地の悪い質問を先生に浴びせることになつてしまふ。そこで先生の長々とした講釈が始まるのであるが、先生の書いた「原日本考」を祿すつぽ読みもしないで、あの中にある話を何度かえつて私には面白かつたし、お蔭様で活字では読めない話や未だ学説にまで出来上らない話を沢山聞いたわけである。如何なる場合にも厭な顔一つせず、此の手のかかる弟子の質問に懇切丁寧に答えて呉れた、とどのつまりは「学問は感動に土台を置かなければ駄目だ」ということになり、先生がそう云われる時には流石の私もかえす言葉もなくいつも黙つて先生の言葉に従う心算になつていた。

柳田国男先生が京大に特別講義にお出でになつていた時、先生が京都の野鳥の鳴き声を聞きたいからと云うので、円山

公園から將軍塚へ登つて、清水坂の裏の方へと東山を峯依いに散歩されたことがあつた。その時どう云うわけだつたかお供は私一人で、私としても生れて始めて小鳥の鳴き声に耳を澄まし、鳴いた鳥の名前を教わつたり、色んな小鳥の面白い生活の話伺つたことがある。鳴き声にも一羽ごとに個性のある話などは聞き乍らでなければ実感が出ない、此の時先生一流の鋭い観察の仕方をおかにか教わつたような気がした。先生の野鳥野草に関する隨筆が本になつてゐるけれども、此の時の感銘は特別で、私にとつても楽しい半日であつた。

此の時私は始めて將軍塚を目の当りに見たのであつて、先生から將軍塚の話伺つてゐるうちに、自分でも当時研究してゐた古墳の話を、整理も見当もつかない儘、不思議に思われる現象などを少し申上げたことがある、その時「君はそれを文章に書き給え、感動してゐるうちに、驚きは驚きとしてその儘書いて置き給え」と先生に云われてハツと思つたことがある。当時考古学と云うものは実証的に精密な観察の下に、それを厳密な学問的体系に仕上げなければいけないものだと思ひ込んでいた私に此れは思ひがけない言葉であつた。古墳を一つ二つ見てもそれは問題にならない、数多く見て而もそれ等の間に普遍的法則を見出したり、比較をしたり分類をしたりしてから始めて学問的考察が行われるのだと思つてゐた。然し考へて見れば柳田先生に云われて氣のつく事は、あんな古墳をつくる事自体不思議なこと、それが何百年間

續いて、而も全国にあること、色んな変つた古墳のあること自体まことに不思議な感動すべきことではないか。勿論考古学的に形態を測量することも大切であるが、將軍塚にしてもわざ／＼東山のでつぺんに造られたことも不思議であれば、鳴動したと云つては天変の前触れかと都人士に恐れられた時であつたであらう。それだつて考へて見れば歴史のうちである。柳田先生が文章にして書いて置けと云われたのは感動の生ま生ましいうちに筆にする癖をつけて置け、それが學問の始まりであると氣をつけて下さつたのに違ひない、福士先生が常に口にされることと同じわけではなからうか。

柳田先生に古墳の話申上げた時は、それより少し前に丹波の古墳調査に行つた時のこと、時間がないので精しい調査は此の次ぎにしようと思ひすがりに歩き乍ら見た竹藪の中の石棺が、私には見馴れない割竹形の石棺であつたのを奇妙なことだと思ひ浮べ乍ら話をしてゐたのだつた。

とかく我々は不思議に思ふことや、感動することは素人の段階であると看做して、早くそんなところを通り越した先きで學問をしなければ専門家ではないと思ひ勝ちだが、柳田先生や折口先生の民俗学の他の人達と違つたようなところは感動に基づいた學問だからではなからうか。柳田先生の學問的對象が名も無き庶民の民俗に向うのも、觀察が自然界の野鳥雜草のたぐいに及ぶのも豊かな人間性に裏づけられた同じ愛情のたまものではないでしょうか。期せずして同じ感動の言

葉を何れも若い時は詩人だつた両先生から自分がさとされるのもあながち不思議ではないと思う。

京都北白川の寓居に福士先生がお出でになられた時、あの太い松の木の見える裏二階の部屋で語つて呉れた話、年の始めと太陽の話、村の長老が村を見渡す高い処へ登つて、元旦の朝日の最初の光りと一語に「大麻良」と叫んだという、どんな話の続きから此んな話になつたのか今では見当もつきかねるのだが、真面目になつて語る先生の口を通して聞いた時にはまことにさわやかなとも云うべき不思議な感動を受けたものである。此の話なども日本古代史とどんな具合に結びつくものやら今のところさつぱり見当がつかず持てあつかひかねるのだけれども、きつと古代信仰の原型を表現しているに違いない。此んな話こそ考古学という学問には最も縁が遠く考古学者の苦笑に値する話であるが、自分は痛烈な学問的爆薬を胸の中に打ち込まれたような気がしている。先生の書いたはつきりとした文章がある。

「実証主義的方法はその成立條件として、古代人の心を得ることを先づ厳密に要求する」

「歴史は畢竟想像による過去の世界の再現である。そして想像たる限りに於て究極に漠然たることは何とも致し方がないが、我等の想像を確実にするために厳正なる手段を尽して追ひ詰めた限りに於ては、その漠然も寧ろよいものである。即ちそれは我等の頭を無際限な空から光を以て撫で

る北極星の如きもので、我等を無用な方向に迷はしめぬ究極の枢軸たるの用を足す。古い事物の追索には厳正な精神の遂行が必要である。だが、かういふ想像の上の可能にして正確なる認識の限界の觀念を併せもたないと、視野が狭められ、真実は得られないのである。」

物を通して心に及ぶのは考古学であるとは云い乍ら、とかく物を扱つて物に止まつてしまふのが考古学の現状である。此れでは文化内容を掴み出すのは勿論のこと、言語・伝承とも手を握ることは土台無理な注文である。他の学問では核心に入る為めの大切なカギとなるべき感動も考古学に於てはせいぜい入口迄引張つて行く手引きに過ぎない。人によつては原語のアルケオロジーを考古学と称するのは潜越だ、古物学で沢山でないかと云う。そういう人には今の歴史学は古文書学か文献学と称して差支えない、それ以上のものでないとも云つて見度くなる。元來歴史学の対象と資料とは違つたものであるばかりでなく、物と心、物と文字、物と言葉とは根本的に違つた世界に属するとも云える。互の学問的純潔をこたわずに文献と遺物と民間伝承が相融合する場所は目的を同じくする歴史の対象そのもののなかにあるのであつて、行きつく迄は互に深淵をへだてているのは云う迄もない。然し乍らどんなに互に違つた方法をたどつても目的は同じ日本古代史であり、而も研究者も亦同じ人間である。場合によつては同一人が三つの部門をかねても不思議ではない。それぞれの

資料と取扱ひの方法の差異を充分心得た上では、綜合はむしろ当然ではないか、その時此れ等結び合わせるものは感動である。「精神の相呼応する領域」は必ずある。そこでは資料は互に助け合つて一つの対象のなかに溶けてしまふだろう。

福士先生が此れからやり度い仕事を指折り数えて示されたことがあつた、日本語の研究、砂鉄、米、サナギの信仰、まことに申訳ない話であるがこまかなことは忘れてしまつたがどれを取つてみても大変な仕事ばかりで到底一人で片付けられる問題ではない。けれども此等はみな同じ日本古代の姿をはつきりさせる為めには必要なものばかりである。小説も書かなければならないと云い出したことがあつた、多分舞台は秋田県の鹿角郡あたりになるのだそうである。その時短い言葉で簡単に云つた赤い紐で飾つた馬に乗つた元氣な若者の姿のイメージは鮮かに私の脳裏にきざみついている。此等の研究題目は先生にとつてはみな一つのものである。そしてそれは又見方によつては考古学方面の私の研究題目である縄文式文化の終末と日本人の北進の問題とも同じものだと云えるかと思う。

京都の研究室に居た頃は古墳と古代国家の成立が専ら問題になつていたのであるが、上京して暫らく俗界を彷徨した末考古学研究を再開することになつた時には石器時代の研究に傾き勝ちである。此のテーマは京都の大学へ行くつと以前、始めて考古学に興味をいだいた頃のものである。その頃

の指導者は天折した先史学者中谷治宇二郎氏だつたことによるかも知れないが、何んと云つても住んでいる土地の影響が強い、京都に居れば土地柄からどうしても古墳が氣になり、東京では石器時代に引きつけられる。昨年夏の発掘には当時中谷氏と人類学教室で同じ部屋に居て机を並べて研究して居られた東大の八幡一郎氏が行を共にして下さつたのは私にとつては感慨無量であつた、中谷氏と一緒に津軽を発掘して以来二十五年振りのことである。此の時の発掘の目的は縄文式文化の終末を明らかにする為めであつた。

日本の新石器時代文化は初まりは相当古く而も継続期間が非常に長い、従つて遺跡の数も多く、分布も至る処に及んでいるが、一応大陸とは隔離された状態の儘生成發展が行なわれたのであるから、そこには他には見られない特殊な現象があるわけである。新石器時代文化としては世界にも稀なほど發展し、爛熟したとも云える。その石器時代最後の文化が花を咲かせたとも思われるのは東北地方であつて、それが結局はどんな具合になつて消えて行つたか、結局は米作農業の弥生式系の金属文化に追われることになるのであろうけれどもことはなか／＼簡単ではない。此の最後の石器時代文化である陸奥式と云うものはかえつて南方へ文化の波動を伝えた時もあるのであつて、特色ある文化の型はなか／＼くづれない、新しい文化に対しても一つのまとまりをもつた儘対抗したと思われふしがある。そのなかには日本石器時代の長い

間の文化的蓄積が残存していたのではなからうか。つまり長い日本の石器時代文化の総決算が行われた時期と場所は此の陸奥式が占めているように思われる。その文化の崩壊過程を明らかにしたいと云うことは、石器時代文化の内容を明らかにすると共に実は新しい文化がどんな具合に浸透したかと云うことにもなるわけである。所が現地に行つて鋳を入れてみて感ずることはなか／＼大変な仕事だということであつて、どうしてもそれに続く時代のことを順を追つて調べてみなければならぬし、又逆に新しい時代からも溯及して行かなければならぬ。所謂奈良、京都或は鎌倉、江戸のことは文献のみからでも或程度のこととは分つてゐるが、津軽あたりになれば旧藩時代は除いてその先は茫漠としてゐる。途中に無住の空白時代を考えない限り、連続して人が住んでゐたに違いない。現に発掘した場所附近にも明らかに石器時代ではない頃の祝部式や土師器が広く散乱してゐるばかりでなく、発掘場所のなかからも出て来る。製鉄関係品と思われるフィゴの破片から真鉄（マガネ）も出た、厚手円筒式の土器は破片ばかりだけれども上から下まで出る。都合良く陸奥式ばかりを取出してそればかりを研究するわけには行かない。此の遺跡のある村は特殊な理由で南北朝時代の文献もある処である。陸奥式の下限の問題にしても此れ迄非常に新しく云われたり古く思われたり極端な説の出で来るのも無理はない。終末を究めるには各方面に頭を伏かさなければならぬ。アイ

ヌ、蝦夷の関係も考えなければならぬし、現在居る人達の先祖のことまで考へて見る必要がある。水田稲作、信仰、伝説、考へることは沢山ある。此処では考古学だ、文献だ、伝承だ、石器時代だ歴史時代だと切り離してはいられない、中央の学者が机上で考へてゐるようなものではない、此処に歴史の現実がある。こうなつてくれば資料ごとの学問だけでは役に立たない。問題を内容的なものに向けるとすれば此れは当然なことである。終末も起原も展開もみな内容的な対象である。資料の厳正も踏み台に過ぎない。

弥生式の起原にしても、古墳の起原にしても、突如と云つてよい程の変化がある。形ばかりを追求して行つては此のギヤップは埋めることが出来ない。物のみに限る考古学の限界は此処にある。かりに新古の編年は出来たとしても、或は始源の形を目で見たとしても全うな解釋には達しないだろう。中谷氏が生前私に「考古学は起原を問題にすべきではない、起原は分らないものだ」と云つたのは立派な見識だと今でも思う。テイポロギー学者の覚悟を語る言葉である。

背後に迫ると云うけれども、心を得ると云うけれども、或は人種を明らかにしたところでそれが生物学的概念に過ぎないならばなんにもならない、人種も民族も文化伝統の負担者と考へられてこそ始めて主体性を得るのである。結局主体性を回復するのは人間である、感動は人間が生きてゐることの標示である。私は富士先生から与えられたイルージョンは大

切にしたい。たとえ直接には學問と結びつかないものであるうとも、それが學問では及ばず小説に託して語ろうとした夢であつたとしても。考古學としてはせめて此の若い主人公に確實な舞台を提供したいと思つてゐる。石器時代の終末と此の馬に乗つた若者とても決して無縁ではあり得ないのだ。

四

福士先生が亡くなつてからでも十年に近い月日が経つた、思えば少年の日先生に會つてから四分の一世紀おそばに居た事になる。若し生きて居られたならばこんな時には何んと答えて呉れたかと思つた事も一度や二度ではない。なつかしい人柄を憶い出すと共に何が先生終生の「関心」であつたかを考へてみたい。日本古代史と云つても普通の意味の學問ではないことは云う迄もない。

「わが在來の學問が日本固有の文化の根源に關しては見方が淺く、視野が狭く、その矛盾や曖昧を根拠にまで踏み入つて質す所が無く、單に表面の糊塗に過して來た……だが斯ういふ状態の見解のまゝでは、國民精神の基礎となる信仰は強力に明瞭に生れては來ない。また妄想妄信の飛翔も制圧が出來ない。……吾々はわが日本の事物の成立に關し、根源の最も古き部分にまで突き詰めて識らねばならぬ。これは古いもの獵りの好奇心の満足のためではない。その意味を明徹純粹の状態の下に捉へ、これの後世の進化

や發達の關係を紛糾なしに、混濁なしに諒解するためである。意味の明徹純粹を得るためには、その根源の状態に諸多の關係をたゞして還元して見るのが正当の手段である。」

〔原日本考〕続篇

先生が或る時私の寓居に來て例のように色々な話をしていられた時、急に話をやめられて何を云われるのかと思つていたら突然「何んと云うても信仰が一番大切だよ、そうぢやないかねえ」と、如何にも同意を求めように云われたことがある。愚かな弟子はその時真意をはかりかねて生返事をしたと思う。今は靜かにそんな時の先生の言動を思いかえしては私も成る程と思つうようになった。年令のせいかも知れない。

「但しわが民族性は神代の先きも今日も、七面倒なことが嫌ひな性格であると決定しても、万事それなら投げやりで、イージーゴーイングで押し通すかと言ふと、宗教上のことでは、後世人の思ひも及ばぬ嚴峻なものがあり、日常生活の些細なことにも嚴格なる儀礼、禁厭が充ちわたつていた。率直に言ふと、一方に於て非常に放縱な所のある日本人の性格を、他に於て実に妙味ある抑へ方、そして導き方を産み出したものは、實に此の民族傳來の宗教の威力、伝統の圧力であつた。」〔原日本考〕

先生の云われる信仰も宗教もキリスト教や仏教を指すのではないことは勿論、日本固有なものだとしても此れ迄云われ來た神道と同じものとも云えないような氣もする。

「筆者の所見では原初のわが祖先の生活は、今の文化人に言はせたら迷信の横行、狂信の圧迫などと評し、現在彼等の自負心を甚だ高所に置いて、無造作に見下して仕舞ふのが落らしいが、精神の内容は、今の人の思ひも及ばぬ敬虔な心情に溢れたもので、信仰と行為との一致等の規律に關しても、過酷に類する峻嚴なものがあつた。」(「原日本考」統篇)

終戦後間もない頃、荻窪の私の寓居にお出でになつた先生を見送り乍ら暗い夜道を歩いてゐた。その時此れからのおやりになる仕事のことを話された、やはり氣にしておられた事は国民信仰の問題で、なんと名づけようかと迷つて居られた、神道と云えば在来のものと思われし、惟神―かなながら―ではどうかなどと星野先生の例などを出されて考へて居られた。長い間の探求の結果ある確信に達したような様子であつた。此の時如何にも大切なことを知らせてやる、此の事は滅多に人に云えない話としておしえて呉れた話がある。天皇が元の木下待從長に「自分は天皇をやめるもやめないも、よく考へてみて、古来の伝統に従うつもりだ」と云う意味のことを云われた、此れを聞いて木下氏も涙が流れて仕方がなかつたという。木下氏から聞いた話として此れを星野先生から聞いたと云う、星野先生は長い間宮中で掌典をして居られた方で先生とはある事から特別の親交があつた。時と場合だけに、どうなることかと心配していた我々にも此れを聞けば

安心だと思わせるような話である。長い間伝統主義を奉じて軽薄な俗流と闘つて來られた先生にはどんなにか此の言葉は有難いものと響いたことであつたらうか。

伝統と云えば所謂學者はどんなことを云うだらうか、恐らく民族なり國民なりが古來持ち傳へた風俗習慣、分けて考へ方の傾向を指して云うもので、一方では國民の進歩發展を妨げるものであると云うかと思つと、他方では伝統といへどもただ単に古いものを守るだけでは意味をなさない、現在に於て過去を生かすという創造的な働きがないと伝統は成り立たない、だから國民を過去に縛りつけるものではなく進歩的なものであると云う、又は保守的なものと進歩的なものとはどちら一方を立てても伝統が成り立たないのであつて、兩者の間には矛盾的弁証法的な關係があつて、その構造に於ては：
：などと論じ來たり論じ去るに違ひない。然し結局の処、伝統そのものはどんなもので我々はそれに対してどうすれば良いかには触れない場合が多いのではあるまいか、触れても結局は観念的な理想主義の御説教に終るのが落ちである。此んな論議は捨て去るべきだ。

我々は伝統の中にあるのだ。此れが第一の前提である。自分分は伝統から離れたつもりで、伝統を切つたりつないだり出来るものと思つてゐるのが間違ひである。先生がすべて理想主義なるものをきらい、ドイツ哲学を排撃したのも元をたせば此処にある。先生ほどの善人が頑として性惡説を唱えて

譲らなかつたのも、人間性の現実に即したからである。人間の性のなかにひそむ暗い深淵を直視したから、伝統の重んずべきを絶叫したのである。人間の自然は悪である、それゆえに伝統をおいて頼るものはない、伝統によつて始めて人間は人間となるのだ、文化とは伝統である。古いからどうか新しいからどうか或は伝統の価値を云うてゐるのではない。前後の脈絡も無く「信仰が一番大切だよ」と突然云つた胸のうちも今なら私にも分るような気がする。

「一体また我が国が他国に優るの何のと優劣比較を試みるのも、甚だ間違つた精神であると信ずる。優らうが優るまいが、えらからうがえらくなからうが、わが民族にとつて我が伝統は絶対なものであつて、そんな比較は元來にゆるされざる筈のものである。……世上には徒らに日本民族に關する自己礼讃の説が、歴史の眞実な証明や驗証の重要意義には目もくれず、自負衒耀を専ら事とする所説の蔓延するは遺憾である。民族をさういふ風に一概にえらいものに祭りあげることばかり妄想してゐては、少くとも民族の祖先の苦勞が判らなくなる。その犠牲、努力、或は失敗、錯誤を突き貫き、正しきに立て直した奮闘や、鬭争の意味を見失ふ。民族自讃論者はこの点空漠な概念世界の彷徨者で、民族の眞実な歴史には触れ得ないものである。我が民族の伝來的な性質、即ち眞実を重んじ、自然を重んじ、明白明瞭を愛する精神にも大に背く。酒々落々と淡泊に、寛

容に、正しきを正しきとする特性を失はせて、徒らに理窟つぽき価値批判論者を作上げ、狹隘偏執の理想主義者を作る。日本大精神といふ点から見ても、断然擯斥せられねばならぬ事である。」「原日本考」

我が民族にとつて我が伝統は絶対なものであつて、良いも悪いも無いものであるなどと云えば如何にも旧式なコチコチの絶対論者を思い出すかも知れないが決してそんなものではない。良いとか悪いとか云うならば伝統は良くもあるし悪くもある。絶対と云えば至上価値と思つても間違ひである。そんな善悪価値のことを云つてゐるのではない。しやれて云えば善悪未分の境一生れぬさきの父母ぞ恐しき一であろう。眞実を重んじ、明白明瞭を愛する我が民族の伝來的な性質、淡泊に寛容に正しきを正しきとする特性と云われると私には福士先生その人の人柄が浮び上つて来る。

昭和六、七年の頃は軍部勃興時代であつて、今から考えれば隔世の感なきにしもあらずと云うわけであるが、軍人の鼻いきは実に荒い。荒木陸軍大臣が中将の儘で登場した頃などは日本も全くどうなるかと思つ程であつた、此の時は先生はムツリニに感心していた頃で（ヒットラーには後々までも感心しなかつた）日本ファシスト聯盟の中央委員か何か重要な位置についてその新聞に書き出したことがあつた。恰度その頃は先生も元気で、今日は御馳走をするからと、我々高校生二人を連れて深川から日本橋の方へ歩かれた。途中時局に

就て論ずることしきりである。またない小さな天婦羅屋に入つて一本お酒を所望して又気焔をあげた。「こういう所の若者は、あんなに不愛憎に威張っているように見えるが、あれがこういう所の風であつて……」例によつて、河岸風の天婦羅屋の若者のことをこつそりと解説して下さるかと思うと、自分で新聞に書いた文章のことを話す「良いとか悪いとか批評すべきでない、吾々は断呼として行動をするのだ」おまけの果てに荒木大臣をからかつたような文章を載せたことを云い「福士幸次郎はどうなると思ひますか」と此方に良い色に赤くなつた顔を向けて聞く、私が返事に困つていると「福士幸次郎は……」と又繰り返す。そこで思ひ入れ宜しく「殺されますよ」と云つた。天婦羅屋を出る時には腰のポケットから小さな新聞紙に包んだ一枚きりの五円紙幣を取出して代金を払つて呉れたのであつた。

北一輝という男は大変な怪物であつて当時はみんなに恐れられていた、或人の話では彼は妙な魔術を使うので真正面から顔を仰ぎ見ることが出来ないそうだと云う話が私達にも伝つて来た。先生も北氏に会つたそうだがそれは本当でしようかと聞いてみた。ちよつと考えて曰く「向うで此方を良く見なかつたようだねえ」と何気なく答えられた。

京都に来られた時国文学の岡見正雄君の家へ二人で行つたが同氏は未だ帰宅していない、母上が一人居られたが直ぐ帰るからと上り込んで待つた。いくら待つても帰らない。先生

は母上と神妙に話をしている。和服に袴をつけた儘端然と座つてゐる。私は足が痛くなつて膝をくづした、どうしても帰らないから我々は帰ることにした、角を曲つて高い道路の上に出た途端に「福士幸次郎と雖もこういうチャンとしたところがある」と膝をくづさずに長い間座つていたことをそれ見るとばかりにつぶやいた。

年配の御婦人を我々は簡単に「おばさん」と云うてあやしまないが、それを氣にした先生はある時「色々たづねてみたがおばさんはいけない、奥さんと云うべきものだそうですよ」と教えて下さつたが、それもその時直ぐ注意せず誰れかに聞いてみてからのことであつた。

実戸さんの話では、二人でそば屋に入つてそばを喰べて、実戸さんを残して代金を外に出て探して来たこともあるそうだが、そばが好物で「そばは勢いの良いのがおいしいのだ」と云い乍らする／＼と旨そうに早く喰べた様子が眼に浮ぶ。

此んな話を並べて行けばハチローのお株を奪うことになるのでやめるけれども、先生の書いた文章も人柄をのみこんで読まないは無駄な議論が重なるばかりである。敢然と正直に事實に立ち向う勇氣と、不断はだらしないうでいても大事な処はキチンとしているのは先生の日本古代に就て考えている所と一致しているように思われてならぬ。

どんな人でもどんな問題でも先生は心の底から愛情をもつて接した、従つて色んな人が色んな問題をもつて相談に来て

いた。そして先生には他人に云えないことも云えなし、微妙なことも一番良く分つて貰えた。「人は大きなことで一致するのではない、こまかなことで一致するのだ」と度々云われた。

學問も芸術もその人のものであるとすれば福士先生の日本古代史もその人のものである。「原日本考」に書いてある事實は違つていても、資料は不十分であつても、思想を我々はつかまなければならぬ。感動を基礎とした祖国日本の研究は単なる概念の羅列や価値の批判で終つてはならぬ。言葉としては簡単にやさしく述べられている先生の古代日本観と云うものは先生の一生を貫いて生れて来たものである。感動にはうそがない、此れが學問の土台である。

福士先生

久し振りに此んなものを書きました。

昔、高等学校の生徒だつた頃、雑誌に書いた短かい文章を先生に見て貰いに深川迄お訪ねした時がありました。それを読んで呉れてから僕は君の先きのこと迄ちやんと分るよと云つて呉れた事がありましたねえ、こうして書いてみると此れ迄どんなに自分は怠けていたか気がついて恥かしいのです、まさかその時今頃になつて此んなものを書くとは思わなかつたでしょう。読んで貰つて先生に何か云われるのもこわいし、読んで貰えぬのはもつと淋しい気が致します。

長い間色んな意味の彷徨の果てに漸く落着いた勉強が出来るようになりました。今しきりに先生から教わつたもの、先生の残して行かれた問題を考へているところであります。

此頃になつて西欧の學者の立つている精神的地盤が少し分りかけて来ました、そして伝統と云うことをしきりに考えます、ヘーゲルもマルクスもキリスト教的歴史観のなから生れたものです。クリストファ・ドーンソンなどは現代に就て稀れにみる透徹した史観をもつて論じていますが基く処はカソリックであります。そうかと思つとトインビーが出たり、英國の學風は面白いところです。此の二人とも若い時には相當考古學に凝つた人達であることも私には何かうなづけるものがあります。

日本の伝統——こう書いてみて私は複雑な何んとも云えない氣持に襲われます。誰れに此の訴えを述べましようか、私は自分で此の氣持をおさえ、出来るだけ勉強しましょう。

日本のことを研究するには先ず先生のお話を解らなければと思つて昔の事を色々憶い出してはその意味を考へているのですが、楽しい議論が出来ないのだからつまりませぬ。此頃柳田先生の処で若い人達に混つて神道史の講義を聞かせて貰つて居ります、先生と似たような事を時々おつしやつているのを聞いているとなつかしい氣が致します、柳田先生に先生のお話が似ているといえれば良いのでしようか。「此の年令になつて今頃そんな事に氣がつくのだから可愛想だよ」とおつし

やつて居りましたが、此頃でもどん／＼と新しい発見や考え方が出て来ると共に新しい問題の緒口を見つけて居られます。伝統の問題に就て柳田先生のような方にお教え頂けることは本当に有難いことであります。

先生から云われたことでもつと良く聞いて置けばよかつたと思われる大切なことが一つあるのです。それは「ゼロ思想」のことであります。吉田一穂さんの「故園の書」の序文を読むと、「文明は一方を加へると共に一方を必ず失はせる」面倒な分数式を書かれて答えをゼロとしてあります。従つて文明が複雑になつても善事とは云えない、「何ものも加へることの出来ぬ文明の発展といふものは、単に変化であつて、何の貢獻でもない。」と書いてあります。此の考えが私には問題であつて、仏教の歴史観とどんな関係になるかもつと追求して行きたいのです。此の文章の出て来る前の方にはパスカルの名前が出て来て宇宙を、精神、物質、慈悲の三つの要素として説明したことを書いてあつて、そこから先生は「人間は慈悲といふ事以外に何の善事もなした事が、嘗てないのである。」と云われて居りますが、そこで私は伝統と慈悲の関係をどんな風に考えたらよいのかと思うのであります。大学の哲学科の学生の頃、先生のお宅を訪ねた時、見送りに出られた先生が昔の長崎村から池袋の方へ出る坂の上で、「ゼロは実は間違いで、本当は一でなければならぬのだが」とあの序文の分数式の答えを訂正して笑い乍ら「ゼロ思想」のこと

を云われましたねえ、私はその時西田哲学の「無」や、ハイデッガーの「ニヒツ」のことなどを自分で云つてしまつて先生のおつしやることに一生懸命耳を傾けなかつたことを思い出します。その後先生の「ゼロ思想」は我々の間では「自明の理」として答えの違つたことも福士先生らしいと云うことで真面目な話題になりませんでした。今更残念なことをしました。東洋の歴史思想の根柢には確かに「ゼロ思想」が流れて居ります。仏教の歴史思想もそう云えるのではないでしょう。か、此処に西洋の歴史思想との根本的違いがあると思ひます。そこで先生の云われる慈悲とキリスト教の愛、仏教の慈悲との関係が亦問題になります。そればかりでなく一体日本の歴史思想はそれ等とはどんな具合につながるのでしょうか、先生が複雑な分数式の答えをゼロと間違つたのも先生の氣のつかない根柢があるようにも思われます。果して文明はゼロか一かそれとも益々数が多くなつて行くものであるか、此れは歴史の謎でもあるし亦歴史観の根本をきめる問題でもあると思ひます。日本の伝統を明らかにすることと共に、此の問題を先生から受け継いで研究して行きたいと思ひます。長くなりましたので此れで失礼致します。

(未完)

(本学専任講師)